

# 原爆文学研究会報

第三四号

原爆文学研究会 二〇一一年六月

読み返す 三月一日に東北地方太平洋沖で起こった地震とそれに伴う津波、そして福島第一原子力発電所の事故の被害や現状を伝える本や雑誌が続々と刊行されている。また、以前に刊行されたものの増刷・復刊も少なくない。原発関連ではたとえば、一九七〇年代後半に出た堀江邦夫『原発ジプシー』や田原総一郎『原子力戦争』などがある。高木仁三郎の本もいくつか復刊されているが、そのひとつ『反原発、出前します』（七つ森書館）は私が大学院修士課程のときに、原子力・科学技術史を専門とされるY先生のゼミで読んだものだ。関連の書籍はこのときから少しずつ集め、本棚の一角にまとめていたが、しかしすべてを十分に読み込んできたわけではなかった。

買ったまま読まないでいた古本のなかに、「別冊宝島81 推進か？ 廃炉か？ 決定版原発大論争」（JICC出版局、一九八八・九）がある。電気事業連合会が作成した『内部資料・原子力発電に関する疑問に答えて』に対して、反原発の立場をとる十五人の研究者・ジャーナリストが、「安全性」、「放射能」、「経済性」、「再処理問題」という観点から反論する。執筆者には高木、堀江、室田武、小出裕章などがある。いくつかの論文を読みながら、巨大地震、原発労働者、電力供給の問題は決まっています。また新たに生じてきたものではないことを改めて感じさせられた。

この巻末には「反ゲンパツ実践集」が提示され、「パソコン通信で脱原発」というアイデアが紹介されている。「メインは電子会議と呼ばれる討論ボード。実際の討論会よりいい点は、発言内容が互いにたいへん理解しやすいということ。（略）便利なのは、討論の記録がそのまま文書として残ること。（略）参加者は（略）匿名あるいはハンドルネームで通せる。（略）BBS（掲示板）も必要だ。さまざまなイベントの情報は、

署名やカンパの願い、推進側の動向、原発現地の情勢など重要な情報源となる。海外のネットに接続して、データベースから情報を引き出すこともできる」。いまから読み返せば、パソコンを使ったやりとりが「実際の討論」よりも必ずしも「いい」とは言えないが、ツールの活用例は示されていたことに気づく。二〇一一年三月一日以前のテキストに内蔵された問題点や可能性の検討は、本を選び、読むことができるもの大きな課題である。

（楠田剛士）

## 第三四回 原爆文学研究会報告

二〇一一年五月七日（土）、立教大学池袋キャンパスで開催した第三四回研究会には約二〇名が参加。

高野氏の発表に対しては「被爆者自身の性欲の問題と被爆者を性欲の対象として眼差す問題を分けて分析した方がよいのではないか」「性欲の問題と生殖の問題を分けて分析した方がよいのではないか」等の質疑がありました。

高橋氏の発表に対しては「夏の花」他を長篇小説のように見せようとした大江健三郎は、なぜ「詩」に楯突いたのか」「原民喜も自覚していない原の可能性を大江健三郎が提示したということなのか」等の質疑がありました。



# 試論：小説・映画・絵画における 被爆者の「性的」描写について

高野 吾朗

この発表における最大の問い、それは次のようなものであった：太平洋戦争で肉体を激しく損傷してしまった日本人男性または女性（特に被爆者）を小説・映画・絵画の中で描こうとする際、なぜその作者はこの人物の「性」の側面をあえて描こうとするのか（あるいは、あえて描かないでおこうとするのか）？

いまだ漠たるこの問いかけは、はたして「真剣に論ずるに足る重要な問題提起」と呼べるほどの代物なのだろうか。もしもその答えが「イエス」というなら、この問いを「料理」するための最良の方法とは、一体いかなるアプローチなのだろうか。この発表でわたしは、いくつかの作品群を例にとりつつ、上記の問いの重要性をあらためて再確認し、そのための最適なアプローチのありようをできうる限り暗中模索してみた。

言及した作品群は多岐に及んだ。何よりもまず、「穢れなき乙女」または「性を感じさせない処女」として主に描かれた被爆女性の具体例として、井伏鱒二『黒い雨』（1968年）のヒロイン・矢須子やTVドラマ「夢千代日記」シリーズ（1981、82、84年）の主人公・夢千代（演じたのは吉永小百合）のありようを概観してみることにした。被爆女性を「原爆乙女」と呼び習わした往時の感覚とよく似たものが、彼女らの描かれ方に深く横たわっていることは、まずもって間違いあるまい。だとすれば、「被爆者の性生活を（あえてエロチックに）描写するなんて間違いなく「不謹慎」と考える人々は、今なお日本社会においては「多数派」なのであるか？もしもそうなら、今なおそう答える人々の根底にある思想（あるいは感情）とは、一体



高野 吾朗 氏

どのようなものなのであるか。

続いて、三好十郎の戯曲『冒した者』（1952年）や丸木位里・俊の連作たるかの有名な『原爆の図』、そして今村昌平監督作品『黒い雨』（1989年）等における被爆女性のそれぞれの描かれ方の中に、ほのかなエロチックさが共通して垣間見えることを一つ一つ確認していった。その上で、被爆した彼女たちを、何が一体どのようにエロチックに見せているのか、という問いの重要性をあらためて再認識してみた。と同時に、被爆女性を特に描く際、「あってもいいエロチシズム」と「あってはならないエロチシズム」の線引きは一体どの辺にありうるのか、といった問題提起もあえて議論の俎上に載せてみた。

最後に、被爆女性（および男性）の「性」がわりと濃厚に描かれている希少ケースとして、安部公房の『他人の顔』（1984年）、福永武彦の『死の島』（1971年）、田中小実昌の短編『浪曲師朝日丸の話』（1971年）、谷崎潤一郎の未完の長編『残虐記』（1958年）の四作品中における被爆者キャラクターたちの描かれ方をそれぞれテキスト分析していった。この四人の作家の手法に共通する問いとして浮かび上がってきたのは、（1）小説のメインテーマを最も色濃く暗示させるためのメタファーとして、どの作品も被爆者の「性」をあえて利用しているように見えるが、それは一体なぜなのか（2）どうしてどの作品も、被爆者の「性」を「同性愛」「近親相姦」「集団セックス」といったような形にあえて描いたのか：であった。

今回の発表は、ある特定の問いに対して何らかの「答え」を見いだそうとしたものでは決してなく、むしろ「新たな問いの掘り起こし」の方へと意図的に重点を置いていた。この「試論」に対し、席上の皆様が下さった貴重なご意見の一つ一つに、この場を借りてあらためて感謝申し上げます。

## 大江健三郎と原民喜

— 「夏の花」の評価をめぐって —

高橋 由貴

本発表は、大江健三郎の原民喜評価を再検討することを通じて、これまでとは異なる原民喜「夏の花」の読解に迫ることを目的とした。多様な読みを誘発する「夏の花」は、様々なコンテキストと接続させることで、常に異なる読み方を可能としてきた。今回は、大江の原民喜評価に基づくコンテキストに「夏の花」テキストを据えることで、「夏の花」読解の新しい視角を作りだそうとする試みである。

具体的には、まず、大江健三郎による原民喜に言及した評論を丁寧に辿り、大江は原の持つ「美しい」「正確」と評される文体的特徴と、「西欧」的な「長編小説」としての構造を称揚していることを確認した。この「有機的」な構造とは、スウィフトの『ガリバー旅行記』のような、「一篇一篇の短い小説が、ほとんど重複することなくつながる」相互連関性と、「原爆被災」を一貫した主題として据える点であった。

次に、大江が編集した新潮文庫版『夏の花・心願の国』の配列構成を検討した。このテキストは、病床の妻との日々を綴った『美しい死の岸に』テキスト群を「I」とし、前衛性・断片性の強い『原爆以降』のテキスト群および「鎮魂歌」と「心願の国」を「II」とし、その間に「III」として『夏の花』三部作を置く構成になっている。また各部分のテキスト配置も時間軸に沿った枠付けがなされている。

さらにここから、原民喜の文芸様式を再度検討した。ここでは、妻との日々を綴る「私小説」に似た体裁の文章に日常を逸脱する超越的な世界を折り重ね、現実と終末を迎える世界を二重写しにする『美しい死の岸に』



高橋 由貴 氏

メタフィクション性の強い「火の唇」、これらIおよびIIIのテキストの特徴を簡潔に明らかにした。その上で、時間的な推移に枠づけられた『夏の花』の構成（壊滅の序曲）↓「夏の花」↓「廃墟から」を見ると、IおよびIIIで確認した記録性「私小説」といった枠組を逸脱させる歪んだ語りと同様に有しながら、原の書き付けた「原爆手帳」の記述に忠実に沿うことで、内容・文体を抑制するテキストであることが明らかになる。さらに、大江の施したI↔IIIの各テキストの配置およびI↔II↔IIIのテキスト配置で読んでいくことで、『ガリバー旅行記』の手法と文体との類縁性を、原テキスト全体から見いだすことができる。『ガリバー旅行記』に類比される点とは、①原「ガリバーの歌」という詩の散文化、②異なる世界を見たことで、滞在していた世界にも、もともと暮らしていた人間世界とも「感覚が食い違う」（原）ガリバーの位相、③各テキストが相互連関性を有することで「長篇小説」としての全体性が浮かび上がるという構造という三点である。

最後に、意味伝達性を脱臼させる詩的緊張感を有する散文的特徴、「狂気」や「病」といった感覚の中で終末のビジョンを織り込む手法、「私小説」風な短編を重ねて一つの主題や構成を浮かび上がらせるという原テキストが持つこれらの方法的な特徴は、「正確さ」「美しい散文」「記録」性を帯びた「西欧的」な「長篇小説」といった言葉で示した大江の原民喜評価と一致し、さらに『新しい人よ眼ざめよ』といった大江の連作短編集の方法へとつながっていくことを明らかにした。以上の点において、大江における原民喜受容の重要性と広がりについて論じた発表であった。

## 彙報

### 第三四回 原爆文学研究会

#### 【一日目】

○日時 二〇一一年五月七日(土) 一四時より

○会場 立教大学池袋キャンパス9号館B01教室

○研究発表

試論：小説・映画・絵画における被爆者の「性的」描写について

高野 吾朗

大江健三郎と原民喜——「夏の花」の評価をめぐって——

高橋 由貴

#### 【二日目】

○日時 二〇一一年五月八日(日)

午前 原爆の図丸木美術館見学 午後 軍需工場跡吉見百穴見学

### 機関誌「原爆文学研究」第一〇号原稿募集

「原爆文学研究」第一〇号を二〇一一年一二月に発行いたします。一〇号という節目を迎える今号には、できるだけ多くの会員のみなさまからご投稿いただきたいと考えております。本機関誌はこれまでに「原爆文学」に関する「批評」「エッセイ」「書評」「創作」を掲載してきましたが、今号では「原爆文学研究会一〇年——これまでとこれから」(仮題)と題して会員の皆さま(可能であれば全員)によるショート・エッセイ(分量は雑誌の書式で一頁未満でも可)も掲載したいと企画しております。もちろん本会の主眼となる「批評」「エッセイ」も例年以上に積極的にご投稿いただきたいと考えております(過去の研究会で発表なさった方で、まだ文章化されていない方も、ぜひこの機会にご投稿をご検討ください)。第一〇号は単に活動一〇周年を記念するだけでなく、研究会の今後のあり方を考える上でも重要な号になると思います。皆ご共奮ってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一一年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八二四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室

### 編集後記

震災を受けて一時は延期も危ぶまれた東京での研究会でしたが、関係者各位のおかげで期日を移さずに開催できました。ありがとうございました。特に仙台から発表に来られた高橋由貴氏と会場のお世話をお引き受けいただいた石川巧氏には御礼を申し上げます。

会の二日目は参加者とともに原爆の図丸木美術館へ出かけました。図版では何度も見たことがあった『原爆の図』ですが、絵の前に立つて、その質感がより濃密に「人間の気配」を感じさせるものであることを知りました。周辺には美しい溪流や花々も見られますので、未見の方はぜひお出かけ下さい。(中野和典)



発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) / e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>